

私たちの平和宣言



▲広島平和記念公園にある「原爆の子の像」



8月6日。澄み切った青空の元。

通勤や通学する人々、家で家事をする人、外で遊ぶ子供たち。

戦争という時代背景がありながらも皆当たり前の日常を送っていました。

誰がたった一発の爆弾でこの青空が黒い闇に覆われると想像したことでしょう。

原子爆弾は当たり前の日常、大切な人、大切な場所を一瞬のうちに奪っていきました。

広島は焼け野原となり人々はもがき苦しみました。

想像するだけで胸が張り裂けそうになるこの光景は76年前、確かにあったのです。

実際にその光景を目にした方々はどんなに恐ろしかったでしょう。

この歴史を忘れてしまってはいけません。そのためにも誰かが繋いでいかなければいけません。

私達は人類が二度とこの過ちを犯さぬよう、戦争の恐ろしさを、平和の尊さを伝えていくことをここに誓います。

我孫子中学校 城野 来海 ・ 後藤 大輝



76年前の8月6日、そして9日。広島と長崎に原子爆弾が投下されました。
たった一発の爆弾はいつもと変わらない日常が来るはずだった市民の生活を一瞬にして奪い去りました。
それから6日後の8月15日、戦争がようやく終わりました。
戦いで命尽きてしまった人。
我慢し続け、若くして命を散らしていった学生や子どもたち。
原爆によって被爆したその日から苦しみ続け、それでも、あの時の恐ろしさを私たちに伝えてくれている人々。
つらい日々を生き抜いて、今この時代まで命を繋いでくれた人。
全ての人がいるおかげで今の日本があります。
彼らの尊い命や思いを無駄にしないよう、私たちは戦争の恐ろしさ、悲しさを伝えていきます。
私たちは戦争について知り話すことで、多くの人が、平和を発信する街にし、二度と同じ過ちを繰り返さないことを誓います。

湖北中学校 植田 ひなた ・ 久野 優太



1945年8月6日、一瞬にして尊い命が奪われました。
あの地獄のような光景を二度と繰り返さないために、唯一の被爆国民である日本人がその事実を伝え続けてきました。
しかし、その行動にいったいどれほどの人が関心を示したでしょうか。
いったいどれほどの人がそこから学びを得たでしょうか。
世界では今も空襲に怯えている人がいます。
私たちと同じくらいの子が戦争の餌食となっています。
それにもかかわらず爆弾の開発が進められている国もあります。
もしこの世から核兵器がなくなったとしても、76年前の悲劇を知らない人が再び核兵器を作り、同じ悲劇を繰り返すかもしれません。
だからこそ、この悲劇を伝え続けなければなりません。
強力な武器を持つことでお互いを牽制しあうことや、皆が戦争に反対する考えを持つことで平和を実現できると考える人など、世界にはいろいろな考えがあります。
派遣を通して学び得た私たちの考えを、たとえ核がなくなっても、平和になっても、この悲劇を繰り返さないためにずっと伝え続けていくことをここに誓います。

布佐中学校 佐藤 夢姫 ・ 濱井 賢治



私たちは今回広島派遣を通し、多くの貴重な体験をさせていただきました。

たった1発の爆弾で広島は暗闇に包まれました。

誰が想像していたでしょうか。

現地に行くことで戦争、原爆の恐ろしさ、命の尊さ、被爆者の方の思い、多くのことを肌で感じる事が出来ました。

被爆者の方が、平和とは「争いがなくどの国とも仲良くできること」と仰っていました。

平和な世界になり二度と同じことは起こしてはいけないというのは、すべての被爆者の方々の思いだと思います。

その方たちのためにも、そして私たちの未来のためにも悲惨な過去は繰り返してはいけません。

そのために私たちは「互いを認め合う優しい心を持ち続ける。」

私たちは誰もが笑顔で暮らせる平和な世の中にすることを諦めません。

湖北台中学校 石黒 花奈 ・ 菊池 未来



「この先何十年、何百年と地球が続く限り、広島と長崎が最初で最後の被爆地であってほしい。」

これは被爆体験講話の際に被爆者の白石多美子さんがおっしゃっていた言葉です。

私達はこの心の叫びを聞いて、戦争への考え方が変わりました。

「戦争」や「平和」と聞くとどこかで自分には関係ないと思っている方も多いかもしれません。

当時も私達と同じ日常があっいつもと変わらない朝を迎えていました。

ですが、たった一発の原子爆弾により人々には今までに経験したことのない自分の体の異常が現れ、もがき苦しみ続けました。

このような光景は教科書上の物語ではなく、76年前にこの日本で実際に起きた事実なのです。

私達はこの戦争のない平和な世の中を守り続けるために、戦争や原子爆弾の恐ろしさをより多くの人に伝えていくことを誓います。

久寺家中学校 吉田 陽菜乃 ・ 北澤 夢栞



昭和20年8月6日午前8時15分。

静かな朝を迎えていた広島街に原子爆弾が落とされました。

ほんの一瞬の出来事によって多くの人の命が奪われ、幸い命が助かって、後遺症によって苦しんでる方はたくさんいます。

戦争は相手を思いやる心がなかったことによって発展したものです。

それとともに私たちは広島の人々が協力をして復興をしてきたことも知りました。

いま私たちが協力しなければならないことは何でしょうか。

普段の生活の中では、思いやりをもって接したり、困っている人を助けたりすることなど、みんなが協力すれば、より良い学校、よりよい地域に発展していきます。

そして、世界に目を向けると、気候変動や、貧困などの多くの問題があります。

しかし、協力すれば何事もできないことはありません。

今こそ平和な世の中を繋げていくために世界が一つとなっていかなければなりません。

私たちは過去の教訓を学び、お互いの多様性を認め尊重しあうことを誓います。

白山中学校 舟木 千智 ・ 高橋 蒼太郎

平和祈念文集



▲「原爆の子の像」に全国から奉納された千羽鶴

我孫子中学校 後藤 大輝



「平和」ということはどのようなことなのでしょう。私は派遣団として広島に行き深く考えることが出来ました。

1945年8月6日午前8時15分、広島へ原子爆弾が投下されました。天気は快晴でとても暑い日だったそうです。仕事や学校に行く人、家で家事をする人、そこには当たり前前の日常がありました。しかし、その日常がたった一発の原子爆弾によって一瞬にしてなくなってしまったのです。

原子爆弾の熱線は約3,000~4,000℃。爆心地から500m離れた所でも2,000℃を超える温度になります。当時は木造の建物が多かったため、付近の建物はほとんど燃えてしまいました。

熱線と爆風によって亡くなってしまった方は12万人以上。その後、放射線の影響などでも多くの方が亡くなっておられ、その数は約14万人±1万人にもなります。当時、広島市内には約35万人もの人がいました。そう考えるといったいどれほどの人が命を落としたことでしょうか。そして、その被害は今でも続いています。被爆者の方は全国で約13万人もいます。被爆者の方々は今もなお原爆の後遺症に苦しめられているのです。

私達は派遣2日目に多聞院というお寺に行きました。多聞院は爆心地に一番近い木造物として平成10年5月に建物全体を被爆の証として永久保存されることになった建物です。

8時15分に鳴る鐘の音を聞いた後、お寺の和尚さんは「この広島町は原爆の影響で何もかもなくなりました。その様子を、鐘を鳴らした後、町を見て想像してみてください。」とおっしゃいました。

そうして、お寺の鐘を鳴らした後に町の様子を見てみるとそこにはビルやマンション、住宅街があり、草や木などの植物がありました。またそこにはいつも通りの町の日常がありました。

「原爆が落ちた日もこうやっていつも通り生活してたんだろうな。」

そう思いながら目をつむって原爆が落ちた日の事を想像してみるとそこには恐ろしい光景が広がっていました。建物は崩れ、草木は燃え、人々は倒れていました。あまりにも悲惨な状況が広がっていました。私はそこで見た広島現在の様子と過去の様子が頭によく残っています。

僕たちが使っている歴史の教科書には原爆のことについてこう書いてあります。

「アメリカは原子爆弾(原爆)を8月6日に広島、9日には長崎に投下しました。」

たったこの1文でしか書かれていないのです。これだけ悲惨で二度とあってはならない出来事ならもっと詳しく書いても良いのではないかと私は思いました。二度とこんなにも愚かな過ちを繰り返さないためにも、もう少し深く学びたいなと思いました。

そして、なぜ大人たちの勝手な都合で罪もない人たちが無惨にも命を落とさなくては いけなかったのでしょうか。大勢の大人や子供の命よりも自分の地位や名誉の方が大事なの でしょうか。いいえ、そんなことは絶対にないと思います。そして、あってはならない と思います。世界中の国が手を取り合って和解をしていけば自然と争いもなくなってい くのではないのでしょうか。

初めにも言ったように「平和」とはいったいどのようなことなのでしょう。辞書で調べ てみると、

「戦いや争いがなくおだやかな状態」

と書かれています。被爆体験講話をしてくださった白石さんは

「戦争がなくなってどこの国とも仲良くできる。ごめんなさいと言えるようにすること。」 とおっしゃっていました。人それぞれ「平和」という言葉の考えは違うと思います。ですが、 どの人の考えを取っても今の世界は平和と呼べないと思います。核兵器をどの国も持た ない。内戦や紛争が起きない。人々が生きていて幸せって思える。そんなことが全てでき ればそれを「平和」と呼べるのではないのでしょうか。今はきれいごとかもしれませんが。でも 少しずつで良いのです。その少しずつを積み重ねることが出来るのであれば「平和」な世 界になると思います。

そして、このことを学んだ私達はそれを伝えていく義務があります。唯一の被爆国とし てこの悲惨な歴史を忘れてはいけません。私もその1人として今回広島へ行って学んだ歴 史をたくさんの人に伝えていけたらいいと思います。

今回、広島へ行って学んだこと、思ったことを胸に刻み、今の世の中に感謝してリレー 講座などのこれからの活動に参加していきたいです。

我孫子中学校 城野 來海



私は平和派遣団の一員として、広島に行ったことで『平和』について、もう一度深く考えてみました。

『平和』を辞書でひくと「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること。また、そのさま。」と出てきました。

そもそも戦争は何で起こるのかについて考えてみました。戦争になるきっかけは、意見の食い違いや利害関係の相違です。世の中には、いろいろな考え方の人がいて、それぞれの立場での利害関係があります。それぞれが意見を曲げず我を通し過ぎるとケンカになるし、それが国対国になると戦争になります。戦争にならないようにするにはお互いの立場を尊重し、折り合いをつける努力が必要ですが、武力で無理矢理相手を押さえつけようとするとうつ戦争になってしまいます。ましてや人類は核兵器という強大すぎる兵器を作ってしまった。その強大すぎる力を使うとどのようなことになるのか。それを実体験で知っているのは世界で唯一の被爆国である日本だけです。私たち日本人は、核兵器を使われてどうなったかを世界中の人々に伝える必要があると思います。

今回広島で、いろいろな方の話を聞いたり、資料を見たりすることが出来ました。その中で、当たり前で過ごしている日常の生活を続けられることが、なんて幸せなことなのだろうと実感しました。

76年前の8月6日、一発の原子爆弾が、たくさんの人々の夢や希望、そしてそれまでの日常生活を一瞬で奪いました。多くの人々は逃げることも出来ず、亡くなっていき、広島は焼け焦げた姿に変わり、生き残った人々にも苦しみが待っていました。

実際に被ばくされた白石多美子さんのお話を聞くと、静かに語られる口調とは裏腹に、想像できないほどの恐ろしさが伝わってきました。話を聞いただけでも震えが止まりませんが、実際にその光景を目にした人はどれほどの恐ろしさを感じたことでしょうか。熱で皮膚が解け、垂れ下がった状態で歩く人々、割れたガラスの破片が身体中に突き刺さって血だらけの人々、黒焦げになって人間かどうかとも判別できない人、川に折り重なったように浮かぶおびただしい数の死体。傷口に群がるハエやウジの群れ。多分、臭いも凄まじく、まさしく地獄絵図だったに違いありません。きっと心にも深く傷が残されたことでしょうか。

しかし、それでも後世の平和のために、こうして被爆体験をお話していただけることは、私たちにとって、とてもありがたいことです。

また白石さんは原爆投下直後だけでなく、風評被害によるいじめについても話してくださいました。「原爆がうつる」と差別を受け、学校に行けなくなってしまったとのことでした。それを聞き、すごく悲しい気持ちになりました。

派遣団の反省会の中で、星野市長から、東日本大震災の時も実際に差別をする人達が出たことを聞きました。その差別があったのは正しい知識がないために起こったとのことでした。放射能被ばくを、あたかも伝染病のように勘違いした人達が、そのような問題をひきおこしたのだと思います。

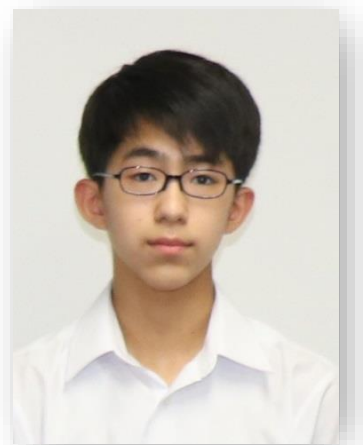
現在の社会には情報があふれていますが、中には正しくない情報もたくさんあります。私たちは正しい知識を身につけ、しっかりと風評被害によるいじめや差別をなくす努力をしていきたいです。

第二次世界大戦が終結して長い月日が経ち、今では戦後生まれの人が全人口の約85%となっているそうです。戦争が実体験ではなく、歴史の上での出来事としてしか知らない世代が増え、戦争の恐ろしさを語り継ぐことが年々難しくなっています。昔に起きたことだからと、戦争について無関心な人も増えてきています。もちろん私も、私の親の世代も戦争を体験したことはありません。しかし、今回、平和派遣団に参加して、平和について知識を深めることができました。そして、平和の尊さを周りの人達に伝える責任も生まれました。

今回の派遣を通じて、広島の方々のお話には、まず戦争を知ってほしいという思いが込められていました。戦争の怖さを伝えてほしい。平和についてしっかり考えてほしいとの思いを受け取りました。伝え方は様々でしたが、それぞれの平和に対する思いを感じました。

戦争がもたらす人類の悲劇を招かないように、そして決して核兵器を使うことのない世の中にするために、私たちが広島で学んだことを、より多くの人々に伝えていかないといけないと思いました。

一人ひとりの思いは小さくても、集まると大きな思いになる。そう、おりづるタワーで投入した折り鶴のように。



「本当の平和とは何か」

私は、8月9日から11日まで、我孫子市の代表として広島派遣団に参加しました。

私が今回、広島派遣に参加をした理由は、本当の平和というものについて知り、これからの社会にそれを伝えていきたいと思ったからです。また、実際に被爆された方々のお話を聞き、当時の日本について知りたかったのも派遣に参加した理由の一つです。

広島についた時、私は思いました。ここは本当に、76年前に原子爆弾が落とされてしまった所なのだろうか。たくさんの方がいて、賑わいを見せていました。そう思ったのと同時に、怖くもなりました。なぜなら、人々が生活している都市の中心に、原爆ドームがあったからです。私は、昔からの姿、形は変わったけれど、広島の方は戦争という過ちを二度と繰り返さないように、昔の記憶となる原爆ドームをあえて残しているのだなと改めて思いました。

活動1日目は、原爆ドームの見学から始まりました。私が見た原爆ドームは、むき出しになった鉄筋が風に打たれ、叫んでいるように聞こえました。これは実際に見たからわかることで、テレビなどでは絶対に感じられないことです。

次に、平和記念公園の見学をしました。その周辺には、戦争や原爆で亡くなってしまった方々の慰霊碑や像がいくつも建てられており、戦争の悲惨さを訴えているように感じました。

活動2日目には、7歳で被爆された白石さんのお話を聞きました。白石さんは、当時爆心地から4kmのところまで被爆されました。私は、こんなにも距離が離れているのにも関わらず、甚大な被害を与えた原子爆弾に改めて恐怖を感じさせられました。白石さんは、3人家族と一緒に住んでいた兵隊の方のうち、2人の兵隊の方を亡くされました。白石さんにとってその2人は、年の離れたお兄ちゃんのような存在だったそうです。また、一緒の家には住んでおらず、少し離れた場所に住んでいた祖母も亡くされました。私は今、4人家族です。また、祖父も祖母もいます。ですが、もし私が白石さんのように原爆で家族を亡くしてしまったら、戦争の悲惨さを人々に語り継いでいくことができなかつたのではないかと思います。白石さんは、自分の体験した、現代を生きる私達には想像もできないようなお話を語ってくださいました。白石さんは、昔は元気な女の子で、読書が大好きだったこと、原爆が落ち裸足で家まで走って帰ったこと、トラックの荷台に亡くなってしまった

人の遺体が載せられていて、夜も眠れなかったこと。中でも印象深かったのは、白石さんが祖母を探しに病院に行った時の話です。そこには、何百人もの人がいて、傷だらけでした。はやく祖母を探そうとしていた白石さんに、

「水をください。水をください。」

と必死に助けを求める人がいました。白石さんは、その人の言う通りに、水を手ですくって飲ませてあげました。すると、それを見ていた病院の人が、白石さんを突き飛ばし、大声で怒鳴りました。なぜなら、水を飲むと死んでしまうと言われていたからです。それからというもの、白石さんはその人の顔が忘れられなくなってしまったそうです。私はその話を聞いて、とても胸が苦しくなりました。なぜなら、その時の白石さんの気持ちはとても悲しいものだったのではないかと思ったからです。少しの優しさが無駄になってしまうような社会は、本当の平和とは言えないと思います。

今年は、新型コロナウイルス感染症の影響で、予定が変わってしまったり、十分に見学することができなかつたけれど、その分、新しいことをたくさん学び、吸収することができました。広島の方々の温かさも感じることができました。

私は、この体験を通して、本当の平和について考えてきました。そして、自分にとっての平和というのを見つけることができました。「平和」とは、1人1人が生活できていることだと思います。戦時中、一生懸命に生きている人がいました。自分の命よりも守りたい人の命を優先し、戦っている人もいました。そのような悲しいことを二度と繰り返さない、させないためにも、1人1人の意見に耳を傾け、協力し合いながら生活することこそが本当に大切なことなのではないかと私は思います。この先、人々が笑顔で、優しくいられるような未来にできるよう、自分自身を見つめ直し、真剣に考えていこうと思います。

この3日間、大変貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

湖北中学校 植田 ひなた



私は小学生の頃から戦争についてとても興味がありました。ですから今回このような機会を頂けて本当に嬉しく思っています。また、支援して下さった多くの皆さんに心から感謝しています。

広島に降り立った時、あまりに発展した都市にとっても驚かされました。原爆が落とされたなんて言われないと気づけないくらい草木と建物が多くて、広島の人たちの凄まじい程の努力を感じ、圧倒されました。しかし原爆ドームを見ると、そこだけ次元が違うように不自然で、被爆前の姿のイメージが全くわきませんでした。ここで何人もの人生が途切れて、生き延びても地獄のような日々があったという変えられない事実だけが、私たちの前に漠然とありました。ある日、いきなり落とされた1発の爆弾によって多くの人々の命が奪われ、罪のない人が殺されて生き残った人まで苦しめました。生き延びた人も、放射線の影響により、時間が経ってもなお体を蝕まれていく恐ろしい兵器。痛くて、辛くて、苦しくて、悲しくて、怖くて本当に地獄だったろうと思います。被爆者の資料を読むと「助けを求められたのに助けることができなかつた。今でもうなされる。」などといった記事が多く出てきます。悪いのは彼らではありません。戦争がなければこのような犠牲はなかったはずです。講話での白石さんのお話にも、水を欲しがった怪我人に水をあげたら死んでしまった、というお話がありました。水も飲めず苦しみ続けるのか、最後に水を飲んで苦しみから開放されるのか。正解なんてないと思いますが、それで「ありがとう」の一言を言ってもらえたならそれは正しい選択だったのではないかと思います。

今回広島で学ぶ機会はなかったのですが、特攻隊についても自身で調べてみました。当時17～32歳、平均年齢21歳の隊員が国のために散っていったそうです。死者は約4,000人にもものぼると言われています。17歳なんて今でいう高校生です。そんな若い人たちが「お国のために」と死ぬなんて今では考えられないと思います。残された遺書を読んでも死を恐れることなく、ましてや残していく家族のことばかり心配していて、本当に素晴らしい人たちだと感じました。

「お国のため」とは、一体何なのでしょう。彼らが命を落としてまで守ろうとした日本は、2発の爆弾でボロボロにされてしまいました。偉い人だけ生き残れば「お国のため」に死んだことになるのでしょうか。日本国民がこんなに死んだのに本当にお国のためになったのでしょうか。国民がいなくてそれは国と言えるのでしょうか。これから産まれてくる

私たちの未来を守るために戦ってくれたのでしょうか。私たちなんてまだ存在すらなかったのだから、自分達のためだけに生きてくれればいいのに。当時の軍部は日本のためにと命を落とした彼らを騙しているみたいだなと思います。命には何にも変えられない価値があって、一度なくしてしまえば二度と戻らないものなのに、それをどんな気持ちで彼らが差し出したのか多くの人に一度考えてもらいたいと思いました。

3日間の派遣を通して、私は当時の戦争の指導者に質問したいことがあります。多くの人々を犠牲にしてまでやった戦争は望んでいた結果になりましたか。自国の勝利を願って死んでいった人々の命は無駄ではなかったですか。ここまでの傷跡も想像していましたか。

少なくとも私は彼らの死には意味があったと思います。彼ら在必死で日本のために戦おうとしてくれたお陰で今の日本があって、彼ら在必死で生きてくれたお陰で生まれた命があります。どうか生きていることを悔やまないでください。「お国のために」と死んでいった人も精一杯戦って生き延びた人も勝利を願って我慢し続けた子供たちも、家を守るために強く生きた女性たちもみんな、貴重な人生を戦争という時代の中で立派に生きていたと思います。しかし、戦争なんかしなければもっといい国で素晴らしい国民と共に素晴らしい歴史が刻まれていたのではないのでしょうか。もしもまた、日本に産まれてきてくれたなら今度はちゃんとそれぞれの人生を生きられるように、今を生きる私たちが平和な日本を守っていきたいと思います。多くの人に戦争の恐ろしさと平和がどれだけ尊いかを伝えていきたいと思います。命を落としてまで日本のために戦ってくれた彼らの物語を忘れることがないように。

まだ核兵器がこの世からなくなるまで時間がかかるとは思いますが、そう遠くはないと思います。矛盾しているようですが、一人ひとりの意思は確実に変わってきています。理想は徐々に現実になりつつあり、被爆者の願いももうすぐ叶うでしょう。

3日間貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

布佐中学校 濱井 賢治



私は、広島駅に着いて、外に出たとき、本当にここに原爆が落ちて、焼け野原になったとは信じられないくらい景観がきれいだと思った。そして、いざ原爆ドームや本川小学校などに行くと、76年前のあの日を忘れてはいけないと訴えているかのようにみえた。

私は派遣に行く前は、戦争、平和って何だろうと考えても、まるで決まり文句のように、戦争は尊い命を無駄に犠牲にするものでだめなもの、平和は、みんなが笑顔ならいいのではないかと思っていた。しかし、私はこの自分の答えに、まだ他に答えはあるのではないか、いや、もっと重要なことに気付けていないのではと思った。そこで私は、広島派遣に行って、自分の答えを見つけ、かつそれを言葉にして、できるだけ多くの人に広めていこうと思った。

平和記念公園では、原爆ドームやさまざまな碑を見た。原爆ドームは、こんな鉄や石などで頑丈に造られた建物が、本来の姿のおよそ4分の1程度に崩されて、これが原爆の恐るべき威力だと思った。崩れ落ちているがれきや建っている姿がそう語っている。周辺は、もともと人が住んでいる住宅地だったが、今は跡形もなく、平和記念公園になっている。そして、公園のいたるところにさまざまな碑が建っている。その中でも、二つが印象に残っている。一つ目は、学徒の碑だ。市長から、もうこの歳で工場に働いていたと聞いた時は、「え、戦争中だったら、私は働いていたのか、そうしたら大好きな野球ができないのか」と思った。国のために働いていた学徒達が死んでしまったことはあまりにもかわいそうだと思った。そして、大好きな野球などができる私は、どんなに幸せ者かと思った。

二つ目は、韓国人の碑だ。この原爆によって、日本人だけではなく、他の国の人も大勢亡くなられたことを知り、広島にいるほとんどの人に影響がでたのだと思った。原爆は日本全体に大きな影響を与えたが、一番は、広島にいた人たちに与えたのだと思う。

次は、おりづるタワーでのことだ。原爆ドームを上から見て、中をのぞいたら、無数のがれきがあり、ここまで崩れたのかと原爆の怖さをもう一度知った。路面電車の車窓から、おりづるタワーの壁にある多くの千羽鶴を見た時は、これほどの人が広島に来ているんだなとちょっと嬉しかった。その電車の中では、キノコ雲を見た人や家族が原爆で亡くなられた人の話を聞いた。その時に印象に残った言葉は、「これまでいい生活だったのに、原爆で一気になくなった。その後は貧乏生活で本当に苦しかったよ」であった。私は、食べ物があって、住まいがあって、家族や友達がいることなどなど、それだけでもう十分幸

せだなと気付かされた。そして、原爆はそれらをたった一発で、しかも一瞬でなくすことを可能にしてしまう兵器だと思った。お話しされている時の顔は、まるで最近起こったことのようにお話しされていて、それほどすごいことだったのだと思った。

多聞院では、二つのことを感じた。一つ目は、想像ではあるが、原爆の恐ろしさだ。鐘を鳴らしたあとに周辺を見て、これらが一気に倒壊するなんてと思った。二つ目は、多聞院にいたおばあちゃんのことだ。ただ挨拶をただけなのに、広島のことを教えてくださいました。広島の方は、戦争や原爆のことについて、詳しくて、かつ関心が高いことを知り、我孫子市、いや日本全体、世界がそうになってほしいと思った。

本川小学校では、外の景観がかなり崩れていたが、中の方がリアルでとても驚いた。特に、ガラスのグラスがあんなにぐちゃぐちゃになっていて、原爆が落ちる前は今の私たちが使うのと同じグラスだったのかと思うと、現場がものすごく熱くて、そして、苦しかったか。また、これはひどいと思ったことがあった。それは、大事な展示に落書きがされていたことだ。これを見た瞬間、何やっているんだと怒りがこみ上げてきた。そして、悲しさにも変わった。この日本にもそういうことをする人達がいるんだと。おそらく、これはただの旅行気分でした人達がやってしまったのだと思う。小さい頃から、広島には原爆が落とされたことなど、戦争について触れる経験を増やしてほしいと思う。そうすれば、ここは、観光名所ではなく、戦争について学ぶ場所だと知り、傷つけることがなくなると思う。

派遣後、家に帰った後、テレビなどをみると、たびたび戦争のことを放送していて、もっと戦争に興味があった。あと、これをどのくらいの人たちが見ているのだろうと考えたり、「ああ戦争ね。」「原爆でしょ。」と知ってるふりして、聞き流している人はいないのかと思った。私は聞いてほしいと思う。なぜなら、被爆者の方の話はいつか聞けなくなってしまうので、それを後世に伝えるためにも、聞いて、語り継ぐことが大事だと思うからだ。

最後に、私は世界中のみんなが共に暮らせるようにと願っている。

布佐中学校 佐藤 夢姫



私は今回の広島派遣で、教科書などには載っていないような深い所を学び、いろいろな事を感じました。

まず1日目、乗っていた新幹線を降りて、すぐに目に入ってきたのは、高くそびえ立つ数多くのビル。76年前に原爆を落とされた事が嘘のようでした。1945年8月6日午前8時15分、広島に原爆は落とされ、約35万人いた広島市民の中で約14万人の方々の命が落とされてしまいました。この日見学した原爆ドームは、当時の様子を鮮明に伝えていました。鉄骨はゆがみ、瓦礫は床に散乱していました。その後平和記念公園に行き、原爆死没者慰霊碑に参拝をしました。平和記念公園には多くの慰霊碑があり、被害の大きさを、身をもって実感しました。その日最後に行ったおりづるタワーからは、広島市が一望出来ました。折り鶴を折り、約50mのガラス箱から平和を祈り、折り鶴を投入しました。積み重なっている折り鶴には人々の思いが込められている、と思うと感慨深いものがありました。

2日目は、始めに多聞院に行きました。多聞院の鐘は爆心地に一番近い木造建物です。木の部分は黒く焼けこげ、天井も板が抜けたりと、ボロボロの状態でした。8時15分に毎日鳴らしている鐘の音を聞きつつ、黙祷を捧げました。

次に、被爆体験講話を聞きました。白石さんは当時小学1年生で、爆心地から4.3km離れた所で被爆されたそうです。白石さん自身は頭や腕の数ヶ所にガラスが刺さってしまったそうです。後日、大好きなおばあさんを母と探しに行った時、川の上にとくさんの人の死体が浮いていたそうです。いろんな辛い思いで見つけたおばあさんは救護所において、後ろから爆風に吹かれ、背中が黒くなる位やけどしていたそうです。その背中には、うじ虫と、10匹位の大きいハエがいて、卵を産んでいたそうです。おばあさんを家に連れ帰り、軍の救護所へ連れ帰ると、その3日後に亡くなってしまったそうです。この他にも、学校で差別を受けてしまったそうです。このお話を聞き、人間の醜さが目に見えた時だと思いました。根拠のない噂を信じて人を軽蔑するのは愚かで、心に余裕がないと、人はこれほどまでも落ちぶれてしまうのか、と怖くなりました。その後、「はだしのゲン」の舞台にもなっている本川小学校平和資料館に行きました。本川小学校は爆心地から最も近い学校で、校舎は外部を残して全焼、壊滅し、10名の教職員と約400名の子供たちの尊い命が一瞬のうちに奪われました。私たちが見学したのは1928年(昭和3年)に広島

で初めて建てられた鉄筋コンクリート2階建て校舎の一部でした。鉄筋コンクリートとはいえ、階段は崩れている部分があったり、壁には数多くの傷がありました。

3日目の最終日は呉の大和ミュージアムへ行きました。呉は「この世界の片隅に」という作品の舞台になっています。日本一の海軍工廠のまちとして栄えた呉は、戦艦「大和」を建造しました。大和は 1941 年に完成し、太平洋戦争当時、世界最大の戦艦でした。1945 年4月1日、アメリカ軍が沖縄に上陸したため、大和は片道分の燃料を積んで自ら浅瀬に乗り上げ、壁となる事を命令されました。4月7日に航空機による集中砲火を浴び、鹿児島県坊ノ岬沖で撃沈し、最期を迎えたそうです。大和の乗組員の言葉で、「進歩のない者は決して勝たない 負けて目ざめることが最上の道だ 日本は進歩ということを軽んじ過ぎた 私的な潔癖や徳義にこだわって、本当の進歩を忘れていた 敗れて目覚める、それ以外にどうして世界が救われるか 俺たちはその先導になるのだ 日本の新生にさきがけて散る まさに本望じゃないか」とありました。この人は国のために命をかけられる英雄のようですが、ご家族の気持ちを考えると複雑な思いになりました。

広島で3日間過ごして感じた事は、広島の人には戦争についての関心がとても強いという事です。2日目に行った多聞院でたまたま会ったおばあさんに挨拶をして、広島に平和について学びに来たと伝えると、自身の体験を話してくださいました。その他にも、出会った人と会話している中で平和について学びに来たと言うと、いろいろなお話をしてくださいました。私は、この貴重な経験をさせてくださった市長や教育長をはじめとする多くの方々に感謝し、自分にできる事は何かを考え、行動していきたいです。原爆が落とされたのは、今から 76 年前で、被爆された方の年齢が高くなっているうえに、人々の戦争に対しての関心が薄くなっているように感じます。76 年前の事は過去の事ではなく、今でも核兵器を所有している国はあります。なので、唯一の被爆国である私たちが平和について強い意志を持つ事が大切だと思います。今一度考えてみてください。自分にとっての平和とは何かを。

湖北台中学校 菊池 未来



僕は、3日間の広島派遣を通して、戦争や原爆のことを学び、平和についてたくさん考えることができました。そして、いろいろなことを感じることができました。

僕は、戦争や原爆は恐ろしいもの、二度と起こってはいけないものだと思っていました。しかし、実際に原爆を落とされた場所へ行き、見たり聴いたりしたことで、原爆とは想像以上に恐ろしく、悲惨なものであり、教科書などの知識により、わかっているつもりになっていただけだったのだと思いました。

僕がこの3日間で強く感じ、思ったことや衝撃を受けたことを3つ紹介します。

1つ目は、僕達の何気ない日常は、当たり前のことではなく、幸せなことだということです。

広島に原爆が投下された日、火傷をした多くの人が「水がほしい。水がほしい。」と叫びながら亡くなったそうです。その事を知り、僕はとても苦しく、自分が今いる環境がどれだけ幸せだったのかと思いました。また、このような事態を引き起こしてしまう戦争や核兵器は、この世界に1つたりともあってはならないと強く感じました。

2つ目は、平和記念公園の見学です。

原爆ドームがとても印象に残りました。原爆ドームの見学をしている時、僕は原爆が投下される前の原爆ドーム「広島県産業奨励館」の写真と現在の原爆ドームを見比べてみました。原爆投下前の広島県産業奨励館は、とてもきれいで立派な建物でした。しかし、目の前の原爆ドームは熱線と爆風の影響により崩壊している状態で、原爆投下前と後ではずいぶん変わってしまっていました。原爆の威力の大きさ、恐ろしさを見せつけられ、啞然とし、言葉が出ませんでした。

平和記念公園の見学でもう1つ印象に残ったことは、自然が豊かだったことです。戦後、焼け野原になってしまった、この平和記念公園が作られたこの場所にはもう草木は生えないと言われていたそうです。しかし、本当にこの場所に原爆が落ちたのかと思われるほど、公園には緑があふれていました。絶望的な状態の中、自然を取り戻せたのは、多くの人々が復興のために力を注いだ努力の結晶だと思いました。とても感動しました。何事も諦めず努力することができたら、道が開けるのだと思いました。

3つ目は、小学1年生の時に被爆した白石さんのお話です。白石さんから当時の貴重な

お話をたくさん聴かせていただきました。

白石さんは、父は仕事で家を空けていたため、母と2人暮らしをしていました。ある日、将校が2人家に泊まることになり、4人での生活が始まりました。2人の将校は優しく、お兄ちゃんのような存在になりました。2人の将校は、あの8月6日もいつものように早朝に笑顔で出かけて行きました。そして、8時15分に原爆が投下され、将校達が帰ってくることはなかったそうです。今朝まで笑顔だった大好きなお兄ちゃん達が一発の原爆により命を落としてしまった白石さんのお気持ちを考えたら辛く悲しい気持ちでいっぱいになりました。

白石さんは、3年生の時、40度近くの熱が下がらず、1年程病院に入院していたそうです。4年生になり学校へ行くと、クラスの男子に、「原爆の病気がうつるから学校へ来るな」などと言われ、いじめを受けていたそうです。それにより白石さんは、心に傷を負い、学校に行けなくなってしまいました。原爆は、体だけでなく、心にも深い大きな傷をつけ、何年経ってもその傷を消すことはできないのだと白石さんはおっしゃっていました。

僕は、尊い多くの人々の命を奪い、体に傷や病気を与えるだけでなく、何年も何年もその傷を残し続ける戦争、核兵器は、この世界に絶対にあってはならないと改めて感じました。

白石さんは「核はだめだと忘れず、平和を願ってほしい。」白石さんが思う『平和』とは、「戦争がなく、他国と仲良くすることだ」とおっしゃっていました。僕もその通りだと思いました。

最後に、このような貴重な経験をさせていただけたことに感謝をし、ここで終わらせず、戦争の恐ろしさ、平和の尊さ、命の大切さをより多くの人に伝えていきたいと思います。この悲しい出来事が二度と繰り返されることがないよう心から願っています。

湖北台中学校 石黒 花奈



私が広島派遣に参加しようと思った理由は、小学校の頃に原爆の話を知り、一瞬で多くの人の命をうばってしまったことに衝撃を受け、興味をもったからです。また、実際に行くことで感じたことや考えたこと、そして平和の大切さや命の尊さ、原爆のおそろしさを多くの人に伝えたいと思ったからです。

初めに行った平和記念公園では、画面越しでしか見たことのない原爆ドームや原爆死没者慰霊碑をみることができました。実際に原爆ドームを見て原爆のおそろしさを改めて肌で感じました。鉄骨は原爆の熱線により曲がっていて多くのレンガがちらばっていました。原爆死没者慰霊碑では、たくさんの花がたむけられ多くの遺族の思いを感じることができました。また、慰霊碑に刻まれている「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませんから」という言葉がとても心に刺さりました。絶対に戦争という過ちを繰り返さないと誓う言葉、世界平和の実現を祈念する広島心がよく伝わってきました。私はこの言葉を実現させるために多くの人に広島派遣で学んだことを伝えていきたいと強く思いました。その他にも、多くの慰霊碑を見ることができました。広島の方だけでなく、各県から働きに来た学徒の方、韓国人など外国の方、実に多くの方が亡くなってしまったと知り、とても心苦しくなりました。

次に行ったのは派遣で初めて知った「平和の灯」です。世界から核兵器がなくなるまで消えない火を見て、世界のどこか今でも戦争が行われていると思い、とても悲しい気持ちになるとともに、早くこの火が消える日が来るといいなと思いました。また、その近くには、日本の国旗と広島市の旗が途中までしか上がっていない半旗というものがありました。亡くなった人を追悼するもので、亡くなった人の気持ちを考えると悲しい気持ちになりました。

他にも公園の中にはアオギリという植物が植えられていました。被爆後は何も育たないと思われていた土地に木が生えたと聞き、明るい気持ちになりました。アオギリの歌を聞くと、広島への思いがよくわかりました。一番印象に残った歌詞は、「広島への思いはただひとつ せかい中のみんなの明るい笑顔」という所です。日本は、今は平和ですが、昔は戦争をしていたし、今も世界のどこかで戦争は起きているから世界中の皆が明るく笑顔でいることは難しいことだと思います。ですが、それはとても大切なことです。いつかこの願いが叶えられる日が来てほしいと心の底から思いました。

次は原爆の子の像です。原爆の影響による白血病で亡くなってしまいましたが、「鶴を

折れば病気が治る」と信じて折り鶴を折り続けた佐々木禎子さんを始めとした多くの子どもたちへの慰霊と平和の願いを込めた像を見て、同じ年齢くらいの人もたくさん亡くなってしまったと思い、苦しい気持ちになりました。また、たくさんの千羽鶴が奉納されており、多くの方の思いを感じることができました。

被爆者である白石さんのお話を伺い、爆心地から4km離れた付近の学校で当時7歳の白石さんは被爆し、ものすごい轟音がして、ガラスが音のように散らばったと聞いてすごい威力だったとよく分かりました。また、訓練されていたことが何もできなかったと聞き、それほどおそろしいものだったんだと思いました。また、白石さんがおばあちゃんを母と捜しに行っている時、「水をくれ」と言われて水をあげたら、その人が死んでしまったと聞きました。自分が助けようとしていた人が自分の目の前で亡くなってしまうのはとてもつらく怖いことだと思いました。私だったらトラウマになると思います。そして、おばあちゃんは、背中に大やけどを負い亡くなってしまったと聞き、つらい気持ちになりました。

多聞院では、鐘の音を聞き、高い所から広島を見わたし、この一帯が原爆により悲惨なことになってしまったということをよくイメージすることができました。さらに、大和ミュージアムでは、大きな船の模型を見ました。船には艦砲や戦闘機がたくさんあり、本物の10分の1のサイズでしたがとても迫力がありました。この船よりもっと大きな船でたくさんの方が乗り、戦ったことを想像してみると感慨深い思いになりました。

白石さんから伺いましたが、原爆による差別があったそうです。放射能はうつらないのに無知な人が「放射能がうつるから学校に来るな」ということもあったそうです。被爆者の方のためにも多くの人に原爆についての正しい知識を伝えたいです。また、今いじめで苦しんでいる人もいると思います。今回の広島派遣を通して学んだ命の大切さなどもより多くの人に伝えていきたいと思います。私は、世界から戦争がなくなるように自分のできる限りのことをし、笑顔の人を増やしたいと思いました。

久寺家中学校 吉田 陽菜乃



1945年8月6日午前8時15分、世界で初めての原子爆弾が広島に落とされました。そして、その年の12月末までに約14万人もの人が亡くなったと言われています。被爆体験講話でお話をしてくださった白石さんは当時7歳、学校で本を開いたときに被爆されたそうです。ごう音が響き渡り、無数のガラス片が降ってきました。そして、一瞬の出来事だったため防空頭巾を被ることもできず、そのまま裸足で家へと走ったそうです。体中に刺さったガラス片の跡は今でも残っています。

「外からザラザラと何かを引きずるような音がして、窓の外を見た。すると、全身やけどをして皮膚が剥がれてしまっている人が、引きずるように逃げている。」これは、私が一番印象に残っている当時の状況です。やけどによって亡くなった方は60%と半数以上を占めており、全身の皮膚が剥がれてしまっていた人もたくさんいたそうです。私は全身やけどを負った男性の写真を実際に見て、なんて恐ろしい光景なのだろうと思いました。そのような光景を実際に自分の目で見ると、私には想像ができません。

白石さんは原爆投下の2日後、離れて暮らしていた祖母を探しに救護所をまわっていました。白石さんが恐怖でトボトボと歩いていると、救護所にいたやけどに苦しんでいる人が「水をください」とお願いをしてきたそうです。白石さんは、必死に手の中に水を入れて持っていきましたが、ほとんどこぼれてしまったため口の近くで手を振ると、唇の上に2滴の水が落ちました。すると、その人は「ありがとう」と言ってくれましたが、それと同時に世話をしている人が走ってきました。そして、「その人に水をあげたらいかん！死んでもうたでしょ！」と言われて突き飛ばされたそうです。その体験がトラウマとなり、今でもその時の言葉が忘れられないそうです。その経験から、白石さんは「言葉はとても大切。すぐに人を傷つけてしまう。」と伝えてくださりました。この言葉は、とても考えさせられるものでした。一つの言葉で、人を喜ばせることもできれば、心に傷を負わせてしまうこともあります。そのため、言葉を発する前にその言葉を言ったら相手はどう思うのかを一つ一つ考えていかないといけないと感じました。そのような一人ひとりの小さな努力が世界の平和へとつながるのだと私は思います。

2日目の本川小学校に向かうとき、近くの公園で遊ぶ小さな子供たちの姿がありました。この公園にはきれいな砂場やカラフルな遊具がたくさんあり、みんなの楽しそうな笑顔がとても印象的でした。76年前は焼け野原だったその場所で楽しそうに遊んでいる

そのような光景を見て、今が平和だということを改めて感じました。ですが、たった1発の原爆で多くの命も広島町も奪ったこと、被爆者の方々の心にも大きな傷を負わせたこと、この76年前の出来事を絶対に忘れてはいけません。そして、二度と同じことを繰り返してはいけません。

私は今回の派遣を通して、今まで私が言ってきた「戦争はしてはいけない」という言葉は表面上だけだったということが一番に感じました。戦争が怖いものということも、してはいけないということもわかってはいましたが、当時どんな状況だったのかということや、原爆の本当の怖さは何一つわかっていませんでした。今までの私と同じように戦争は怖いもの、してはいけないもの、ということとはほとんどの人が思っていることだと思います。でも、本当の原爆の怖さを知っている人は、案外少ないのではないかと思いました。お話をしてくださった白石さんは「ずっと戦争がない日本になってほしい。喧嘩をしてもごめんなさいと言えるようになれば、それが平和につながる。二度とあんなことは起こしたくない。」とってくださいました。今回の派遣では今までは知らなかった、原爆のことを多く知ることができたため、私たちが周りの人に原爆の本当の怖さを伝えていかなければいけないと改めて感じました。

これから行われるリレー講座などでは、よりわかりやすい言葉で、なおかつ詳しく伝えることを課題として、たくさんの人に原爆の本当の怖さを伝えていきたいと思います。そして、世界中の人々が世界の平和について考え、心の底から「戦争はしてはいけない」といえるようになってほしいです。また、世界中の核兵器がなくなったとき、平和の灯にともっている火は消されるそうです。いつかその火が消せることを、願っています。

久寺家中学校 北澤 夢椛



「76年前の地獄を二度と繰り返させない」。これは私が最も強く感じたことです。

私はこの夏、広島派遣団として広島を訪れました。派遣1日目、「平和記念公園」の見学をしました。路面電車から降りて真っ先に目に入ったのは、圧倒的な存在感を放つ「原爆ドーム」でした。原爆ドームの周りには、破片やがれきが当時のまま残されており、たった一度の爆風で外壁ははがれ、鉄柱も曲がり、建物をボロボロにする核の恐ろしさを感じました。補修を繰り返しながら今もその姿があるのは、世界中の人々から集まった募金や、広島の人々の税金を使って守っているからです。けれど、その募金活動を知らない人が多いと思います。そこで、今の時代だからこそできる SNS などでの募金活動の存在を広めて、原爆の象徴を残し続けるべきだと思います。そして、私達が訪れた平和記念公園、そこはかつて今の私達と同じように人々が暮らしていた町でした。掲示されていた当時の写真を見ると、木造の家がたくさん並んでいて、76年前には人々の生活や日常が確かにこの場所にあり、夢や希望に向かって羽ばたこうとしている人々もいた中、一瞬にして全てが無くなってしまった事実恐怖を感じ、胸が苦しく悲しい気持ちでいっぱいになりました。

派遣2日目、この日は朝から爆心地から 1.7 km離れた地点にある「多聞院」を訪れました。この寺院では、原爆が投下された 8 時 15 分に毎日鐘を鳴らしています。私達はその鐘の音を聴きながら黙祷を捧げました。その後、被爆体験講話として白石多美子さんに貴重なお話をさせていただきました。白石さんは、7才の時に、爆心地から4km離れた学校で被爆されました。白石さんは元気のいい女の子だったそうです。原爆が投下された8時15分、大きな音が響き渡ると共に、窓ガラスが雨のように飛んできて、爆風で下駄が全部吹き飛ばされてしまったので、7才の白石さんは裸足で「家に帰らなきゃ」と無我夢中で走りました。家に着いて、お母さんに言われて初めて気づいた事、それは白石さんの体が想像しただけでも目をつぶりたくなるような悲惨な状態になっていたことです。大ケガをした事すら気づかない程必死だったのでしょう。しかも、白石さんの被害は体だけでなく、心にも深い傷を負いました。白石さんが4年生の時、大好きな学校へ行ける事に心を躍らせながら登校すると、「原爆の病気がうつる！」と風評被害を受けたのです。それ以降、学校にも行かなくなり、元々の元気な性格とは真逆の性格になっていきました。7才の子供がたった1発の原子爆弾によって、今までの生活が一瞬で奪われ心も体も苦しむ

事になりました。原爆は街や生活を壊すだけでなく、人々の心も奪うものなのだと知りました。そして実際に被爆した方のお話を聞いて、私が知っていた戦争はなんて表面的な部分しかなかったのだろうと思いました。私は、テレビや映画で残虐なシーンが出ると目をそらしたり、耳をふさいだりしてしまいます。ですから当然、戦争の写真や映像ももちろん直視する事が出来なかったので知識が少なく、「戦争」とはどこか遠い存在で作られたお話のような気持ちがありました。しかし、今回の広島派遣という貴重な機会を頂いたおかげで、これが「現実」だと思い知らされました。私達のような子供でも愛する親や兄弟、友人を失い、孤独に生きる人が多くいました。それが戦争なのです。しかし、76年経った今でも日本で必ずしも戦争が起こらないという保証はありません。冒頭でも述べたように、人々を苦しめるだけの戦争が二度とあってはなりません。その為には世界で唯一の被爆国「日本」がもっともっと強く原爆の恐ろしさや、戦争は絶対にやってはいけないと訴えるべきだと思います。

私は吹奏楽部の夏のコンクールで「ラッキードラゴン～第5福竜丸の記憶～」という曲を演奏しました。第5福竜丸というのは、1954年にビキニ環礁で行われたアメリカ軍による水素爆弾実験により、多量の放射性降下物を浴びたマグロ漁船の事です。そのコンクールの予選で金賞を頂き、本選へ進める事になりました。その本選での演奏が行われたのが、広島派遣から戻った翌日でした。私は広島で学んできた戦争の本当の恐ろしさや、戦争以外でも、またもアメリカの犠牲になった第5福竜丸の船員さんの悲しみを胸に、心を込めて演奏しました。私が広島派遣に参加し、コンクールでこの曲を2度も演奏できた事、不思議な「ご縁」を感じています。

この先私に出来る事は、この派遣で出会った素敵な仲間と共に戦争や平和について発信していく事です。この先何十年、何百年と地球が続く限り、この地球で広島と長崎が最初で最後の被爆地であってほしいと心から願います。



みなさんは「原爆」について知っていますか？原爆は広島に落とされ、摂氏約3,000度から4,000度の熱線を出し、爆心地から約1km以内にいた人は、皮膚が焼きつくされ、ほとんどの人が亡くなりました。また、この熱線は市内のあらゆる場所から火事を引き起こし、爆心地から2km以内の範囲では、燃えるものはすべて燃えてしまいました。これだけではなく、爆風のため人はふきとばされ、爆心地付近の鉄筋コンクリートの建物は天井が落ち、窓や扉がふきとばされ、ほとんど壊れてしまいました。そして、原子爆弾が爆発したとき大量の放射線を出し、これが人体に大きな障害をもたらしました。特に爆心地から1km以内で、直接放射線を受けた人はほとんど亡くなりました。そして、放射線の影響は長い間人体を苦しめました。この原子爆弾による死者は14万人にもものぼると言われています。この原爆が落とされた広島のことをみなさんに伝えます。

この派遣を通して、3つの面で広島について感じることができました。1つ目は見る・歩く面です。まず原爆ドームです。原爆ドームは昭和20年8月6日、史上はじめての原子爆弾によって破壊された旧広島県産業奨励館の残骸です。人類史上最初の原子爆弾による被害の惨禍を伝える歴史の証人として、また、核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボルとして世界遺産に登録されています。そして、平和記念公園についてです。原爆が落ちる前は、そこは町でした。しかし、原爆により焼け野原になってしまい、復興がその地は難しいと考えられ、公園になりました。そのためまだ地中には、亡くなった方の骨がうまっているそうです。そこでは多くの人がうめられています。その人たちは、やけどが激しく誰が誰なのかわからなかったため平和記念公園にうめられたそうです。その人たちは家族に最後会えなかったのです。そう考えるととても心が痛みました。

2つ目は、「食」の面です。広島といえばお好み焼きが有名です。実はお好み焼きは原爆ととても深い関係があります。たった一発の原子爆弾により、広島は町は一瞬にして灰燼(かいじん)に帰し、運良く生き延びた人々は今日一日を生きるのに必死になりました。終戦後、食糧難を救うためにアメリカ軍による配給が多かったのが小麦粉でした。広島の人々は小麦粉で、かつては子ども向けのおやつだった「一銭洋食」をベースにした料理を作ることを始めました。具には海産物や野菜を加え、高騰していたネギの代わりに安価でボリュームのあるキャベツを入れ、鉄板の上で重ね焼きして調理しました。それらは主に屋台で売られ、腹持ちを良くするために焼きそばを加えるものも出始めました。これが広

島風お好み焼きの原型です。その後、お好み焼き屋などの屋台が集まってきました。そこは戦後復興に邁進する広島の人々が活力を養う場となりました。

3つ目は聞く面です。被爆体験講話を聴きました。そこで白石さんにお話を伺いました。白石さんは7歳の時に小学校で被災しました。小学校で本を開いた時に大きな音がして、ガラスが割れて降ってきました。そして、家に帰りたという一心で泣きながら家に帰りました。その日、白石さん自身の体中にガラスが刺さりけがをしたそうです。そのため母に治療をしてもらい家で過ごしたそうです。次の日、祖母を探すために外に出ると、ザラザラと溶けた皮膚を引きずっている人や倒れている人がいっぱいいたそうです。その後祖母は見つかりましたが、見つかった3日後に亡くなってしまったそうです。母と二人で生活をしましたが、学校での差別に苦しんだそうです。結婚するときも差別があったそうです。

そして、最後に白石さんはこうおっしゃっていました。
「身内や周りの人に原爆は良くないと伝えてほしい。二度とおこらないようにみなさんが平和を守ってほしい。これが被爆者の願いです。」

原爆が落とされてから75年という歳月を経て、核兵器禁止条約が発効されました。しかし、これはスタートでしかないと思います。この原爆を落とされたという事実を忘れずに後世に伝えていくことが我々、若い世代の使命だと思います。



今回の広島派遣で、自分では分かっているように感じていた原爆の恐ろしさが表面の部分しか知らなかったことに気づきました。特に印象的だったのが、平和記念公園や本川小学校の見学、被爆体験講話の3つです。

1つ目は平和記念公園の見学です。平和記念公園内にある原爆ドームは、テレビで見るよりも大きくとても迫力がありました。76年が経った今でも、修復されながらも昔と同じ形で残っていて、広島の方々の、原爆があったことを忘れないでほしいという思いが強く伝わりました。また「安らかに眠ってください」と書かれた記念碑の後ろにある火は、世界中から核兵器がすべてなくなるまで、燃え続けているそうです。この火を一刻でも早く消すために、広島派遣に行った私たちが地域の人や学校の人に広島で起こったことを伝えたいと思いました。小さな輪から始めれば、いつかは大きな輪となって世界中の原爆を知らない人にも伝わって戦争がなくなっていくのではと思います。

平和記念公園には原爆ドームや記念碑だけでなく、様々な慰霊碑や塔、像が建っていました。学徒の慰霊碑の他にも外国人である韓国人原爆犠牲者慰霊碑があって、原爆の犠牲が日本人だけではなく外国人にもいたことを忘れてはならないと思いました。

原爆供養塔には、身元の分からない人たちの遺骨が納められています。もし自分の家族が被爆して遺骨が見つからなかったらと思うと胸が苦しくなります。

2つ目は本川小学校の見学です。見学しておどろいたことは、昭和3年に建てられた建物なのに、鉄筋コンクリートでできていたり、地下室があることです。これを見て広島が戦争で大きな被害がでるかもしれないから、1つでも多くの命を救いたいと未来予想をして建てられたのでは、とすごく衝撃的でした。

中に展示されているものにもおどろいたものがあります。「溶けたガラスびん」という名前で展示されているガラスの中には、入り口がふさがって底に残ってしまった水が入った状態でした。また原爆によってドアがなくなり戸枠だけが残っているものも当時の状況がはっきりと映し出されているようでした。原爆が落とされたあと死体を焼くため、小学校の校庭が火葬場となりあ、通常では考えられないほどたくさんの死体が出て、感染症が広がらないようにすぐに燃やすのはとても劣悪な状態だったと考えられます。これからずっとこのようなことが起こってほしくないと思いました。

3つ目は被爆体験講話です。小学1年生の時に被爆した白石多美子さんが話してくれま

した。お話の中で「学校の中で本を開いた瞬間に轟音が聞こえた」とおっしゃっていて、76年が経っていてもとても細かく覚えていて、それだけ衝撃的なことだったのだと思いました。救護所に行った時のにおいやおばあちゃんの背中への火傷、そこに湧いてくるうじ虫など、考えられないほど想像を絶するものだったと思います。しかし周りの人がたくさん亡くなってしまいう中でも、白石さんがここまで生き抜いていたことは奇跡だと思いました。

このように被爆者の方々が今も生きていらっしゃることはすばらしいと思いますが、私たちが広島に行けたことも1つの使命だと思ってリレー講座や平和活動につなげていきたいです。

私は実際に原爆を体験した人から話を聴いたので、戦争を二度とやってはいけないということを強く感じることができました。しかし、被爆体験者の方々がずっと生きていられるわけがないので、戦争の記憶を後世にはっきりと伝えるのは難しいのではと思いました。それでも戦争の記憶は伝えていかなければいけないので、二度と戦争が起こらないように自分も本当に被爆をした方たちのように、戦争や核兵器の恐ろしさを白石さんから受け継いで鮮明に伝えていきたいです。